

『石丸繁子俳句書』

17文字のアート

平成22年11月12日

aaca174回フォーラム「俳句書とトーク」

主催 社団法人 日本建築美術工芸協会

会場 ニュートーキョー 数寄屋橋本店 9F ラ・ステラ

講演内容

1、はじめに

- その1、愛媛に関わる俳人の句を書表現 - 芝不器男・正岡子規・種田山頭火
- その2、「俳句書」の作品制作

2、「子規」＝「四国猿」の上京

3、「石丸繁子俳句書」の背景

その1、子規との出会い

その2、子規の俳論

- 1) 俳論「瀬祭書屋俳話」 - 月並俳句を否定
- 2) 俳論「俳諧大要」 - 俳句の標準
- 3) 俳論「瀬祭書屋俳話」 - 俳論の基本姿勢

4、子規の「俳句革新」 - 「俳句分類」が原動力

その1、子規の三大偉業

その2、「俳句分類」の契機 - 夏目漱石との論争による

その3、「俳句革新」 - 「俳句分類」作業による

その4、子規の写生論 - 中村不折の影響

5、作品 - 「松山と子規」

その1、愚陀仏庵の子規 - 俳句の指導、散策吟行(子規最後の帰郷)

その2、帰京途上、奈良へ

その3、故郷松山への思い - 帰郷 松山鮓

6、作品 - 「子規の挑戦 - 俳句革新」

その1、面白い句 - 俳句雑誌「ホトギス」へ掲載。「猫戀」

その2、明治の「新題」(新季語)

7、作品 - 「根岸の子規」

8、おわりに

1、はじめに

その1、愛媛に関わる俳人の句を書表現 - 芝不器男・正岡子規・種田山頭火



子規の横顔
明治33年12月24日



松山市立子規記念博物館



今展は、『アントレプレナー子規』の句を書表現しました。
子規は明治という新しい時代の開化期、伊予松山から大志を抱いて東京へと旅立ちました。
子規は、『俳句は文学であり芸術である』と提唱し、『美の標準』をキーワードとして、『俳句革新』
という『道』を歩み上つていきました。その『道』の上の『道』は、『アントレプレナー子規』の
姿であり、伊予松山が誇れる『俳句子規』でもあります。
展示内容は、『松山の句』・『明治の新語（新季語）句』・私が『面白い』と思った句を素材とし
て作品化いたしました。
ご高覧賜り、ご鑑評いただければ幸いです。

石丸繁子 書道展

2010年4月12日(月)～17日(土)

◆12日 13:00 OPEN ◆13:00～19:00 ◆17日 15:00 CLOSE

松山市・松山市教育委員会・家庭新聞社・新報放送・あいテレビ
愛媛CAＴV・お世話人日本建築家協会 長岡会

※年表のみの公開とさせていただきます。

石丸繁子



画廊「るたん」個展の風景

その2、「俳句書」の作品制作 - 2000年から。「俳句書」の原点は芝不器男

(1)2000年 山口・毛利邸毛利ミュージアムにて個展。

「芝不器男俳句書道展」を開催。

「樺の中くしくも明き夕立かな」



(2)2000年 イタリア・ウルビノ市における

「現代日本芸術展」に出展。

「たんぽぽのわた毛ただよう窓辺かな」



(3) 2001年 スペイン・バルセロナにおける
「バトリョ邸芸術大展」に出展。
「永き日のはとり柵を超えにけり」



(4) 2002年 奈良東大寺「東大寺無限展」に出展。
「一片のパセリ掃かるる暖炉かな」



(5) 2002年 フィンランド「神話創世展」に出展。
「かの窓のかの夜長星ひかりいづ」



(6) 2002年 ロシア・サンクトペテルブルグにおける
「サンクトペテルブルグ国際殿堂展」に出展。
「沈む日のたまゆら青し落穂狩」



2、「子規」=「四国猿」の上京

子規は明治16年6月、壮大な夢を抱いて伊予松山から上京。
その年9月に写した写真の裏へ「四国猿」と大きい字で記している。
「四国猿」というのは模倣的人間、四国の田舎者という意味が込められているが、子規は卑下しているのではなく、むしろ胸を張っている子規の姿をうかがうことができる。
それは、子規が模倣的でなく、創造的、個性的でありたいと念じていたからである。

明治31年8月、新聞「日本」に「われは」の題で八首の短歌を発表。

その冒頭の一首

「世の人は四国猿とぞ笑うなる四国の猿の小猿ぞわれは」



子規の写真 明治16年9月2日



五友と記念写真 明治16年11月

3、「石丸繁子俳句書」の背景

その1、子規との出会い - 2007年

- (1)2007年 真言宗御室派総本山仁和寺御室会館にて個展。
「光と闇の交響楽」 - 不器男と子規その俳諧の世界
バイオリンの生演奏(即興の曲)に合わせてパフォーマンス。
「永き日のにほとり柵を越えにけり」



- (2)2007年 松山市立子規記念博物館にて個展。

「俳句書 子規と不器男」-石丸繁子のロマン(作品解説・パフォーマンス)
「草茂みベースボールの道白し」



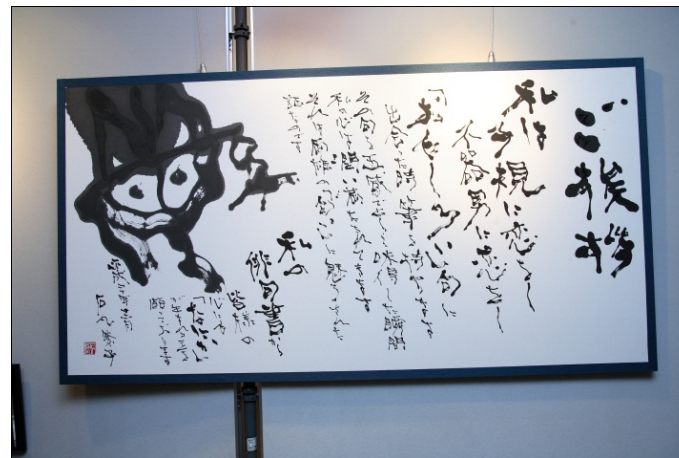
西村征一郎先生ご来館



(3)2008年 松山市立子規記念博物館にて個展。

「石丸繁子俳句書 - 子規と不器男」(作品解説・パフォーマンス)

「夏帽に桔梗さしたる生徒哉。」



作品解説



パフォーマンス

その2、子規の俳論

1) 俳論『癩祭書屋俳話(だっさいしょおくはいわ)』 - 月並俳句を否定

自派の新俳句(我)と月並俳句(彼)とを5点に亘って比較。

第五「我に、俳諧の系統無く、また流派無し、彼は俳諧の系統と流派とを有し、かつ之があるがために特種の光榮ありと自信せるがごとし、従ってその派の開祖およびその伝統を受けたる人には特別の尊敬を表し、かつその人らの著作を無比の価値あるものとす。……」

「芭蕉忌や吾に派もなく伝もなし」と芭蕉忌に言い放った子規。

2) 俳論『俳諧大要』 - 俳句の標準

本文「第一 俳句の標準」

「俳句は文学の一部なり、文学は美術の一部なり、ゆえに美の標準は文学の標準なり、文学の標準は俳句の標準なり、すなわち絵画も彫刻も音楽も演劇も詩歌小説も皆同一の標準をもって論評し得べし」

「標準」とは「皆同一」であるとの見解を示し、「俳句は文学であり芸術である」と説いた。

3) 俳論『癩祭書屋俳話』(だっさいしょおくはいわ) - 俳論の基本姿勢

「俳句に限らずすべて詩歌文章を解するにはその作者とその特性とその時代の風調とを知らざれば大なる誤謬を来たすは常のことなり」(発句作法指南の評)

4、子規の『俳句革新』 - 『俳句分類』が原動力

その1、子規の三大偉業

『俳句革新』 『短歌革新』 『文章革新』

その2、「俳句分類」の契機 - 夏目漱石との論争による (明治22年12月31日)

夏目漱石が書簡で「思想の涵養」を強調。

「書き続けたりとて子供の手習いと同じことにて、
手習いを少しくやめて読書に力を費やし給え」と忠告。

分類、記録好きの子規に、読書を進めたのである。



向島隅田川畔 長命寺の桜餅屋に下宿していた頃の子規
明治21年

その3、『俳句革新』 - 「俳句分類」作業による(明治32年まで)

俳論(写生論)『獺祭書屋俳話』

明治25年6月26日、新聞「日本」へ連載開始。(10月20日まで38回)

俳論(写生論)『俳諧大要』

明治28年10月22日、新聞「日本」へ連載開始。(12月31日まで27回)

新聞「日本」の紙上で月並俳句を批判し、写生を説く。

その4、子規の写生論 - 中村不折の影響

子規の写生論は、洋画家中村不折の教え「結構布置」による

「結構布置」はコンポジションの意。

構成、組み立てに配合を加えたもの。

句会がコンポジション実践の場。

5、作品 - 「松山と子規」

その1、「愚陀仏庵」の子規 - 俳句の指導・散策吟行(子規最後の帰郷)

日清戦争の従軍記者として中国からの帰途、船中で咯血。
神戸の病院を退院して養生のため松山へ帰郷。

畏友、夏目漱石の下宿、愚陀仏庵に52日間滞在し
その間、散策吟行、俳句の指導などをして過ごす。

その時の紀行句集を「散策集」と題した。

子規は松山近郊に5回の散策吟行

明治28年9月20日 柳原碌堂(極堂)と石手寺、道後公園へ

明治28年9月21日 柳原碌堂・中村愛松・大島梅屋(松風会員)と
常楽寺(六角堂)から御幸山麗へ

明治28年10月2日 一人で、石手川堤から薬師寺へ

明治28年10月6日 漱石と、道後、大街道新栄座の芝居小屋へ

明治28年10月7日 村上霽月に誘われて、正宗寺から余戸、今出の霽月邸へ



坊ちゃん列車



道後温泉本館前



松山城



従軍前に拝領の刀を持ち記念撮影
明治28年3月30日

桔梗活けてしばらく仮りの書齋哉 - 漱石寓居の一間を借りて - (明治28年)

夏目漱石が松山中学校に英語教師として在住していたので、その下宿へ居候。

漱石は、2階へ、子規は1階2間を使用。

漱石の俳号愚陀仏にちなみこの寓居を愚陀仏庵という。

この書齋での子規は、新聞「日本」へ原稿を毎日書いて送ったり、松風会の俳人達に俳句の指導をした。二人の交友ぶりを語る逸話が多い。



松山の城を載せたり稲筵 （まつやまのしろをのせたりいなむしろ） （明治28年）

9月21日散策吟行の句。

秋天の澄み渡る松山平野に高く聳え立つ松山城を中心として、広々と広がる稲田。刈り入れた稲を筵に広げて干している庭から、遠く松山のシンボルであるお城が小さく見えたのであろう。その情景を、「城」と「稲筵」を意識しながら表現した。



畫をかきし僧今あらず寺の秋 （えをかきしそういまあらずてらのあき） （明治28年）

山本や寺は黄檗杉は秋 （やまもとやてらはおうばくすぎはあき） （明治28年）

「千秋寺」と前書き。

この二句は、9月21日、中村愛松・柳原極堂・大島梅屋
ら三人とともに、愚陀仏庵から六角堂を経て、御幸寺山
の麓まで散策、吟行をした時のもの。

松山城の北側にあたる、この御幸寺山の麓に寺町と呼
ばれるところがあり、その中程に、中国風の山門と本堂、
杉並木のある黄檗宗千秋寺があった。

当時十八代住職周道は、南画をよく描いていたらしい。

秋の気配が漂う寺を、久しぶりに訪れ、懐かしさでいっば
いの子規の姿が見えてくる。



柿の木にとりまかれたる温泉哉 (いでゆかな) (明治28年)

「温泉樓上眺望」と前書き。

明治28年10月6日、子規はこの日、漱石を伴って道後方面へ散策吟行。

道後温泉本館の三階から眺めた景を詠んだもの。

この温泉本館からの眺めは、正面にも右にも左にも柿の木があり、まるで温泉が柿の木に取り囲まれているような感じであり、私の瞼にもこの景が浮かんできた。



その2、帰京途上、奈良へ

柿くへば鐘が鳴るなり法隆寺 （明治28年）

「法隆寺の茶店に憩いて」と前書き。

生涯最後となった松山を去り東京へ帰る途中、奈良へ。

法隆寺近くの茶店に腰をかけて好物の柿を食べていると、

法隆寺の銅鐘がゴーンと鳴った。

柿を好物とする子規の姿が見え、そして静かな奈良の町に

響く鐘の音が聞こえてくるようである。

この句は、中村不折から教えられた写生、

「結構布置」=コンポジションを実践。

構成や組み立てに配合を加えた句。

奈良と柿を取り合わせたのが子規の法隆寺の句。



その3、故郷松山への思い - 帰郷 松山鮎

子規は「故郷には帰りたい、住みたい」と切実に思い続けた。

「養痾^(あ)雑記」へ「故郷」なる文を発表。

「故郷近くなれば城の天主閣こそ先づ目をよろこばす種なれ。低き家、狭き町、淋しき縄手、丈高き稲の穂、鼻の尖に並びたる連山、をさなき頃より見馴れたる一軒家、見るもの皆莞爾として我を迎ふるが如く何れなつかしからぬはなし。」

「嬉しきも故郷なり。悲しきも故郷なり、悲しきにつけても嬉しきは故郷なり。」

9回に亘る帰郷

第1回 明治18年7月3日～8月29日

第2回 明治20年7月中旬～8月末

第3回 明治22年7月3日～9月25日

第4回 明治22年12月24日～明治23年1月23日

第5回 明治23年7月1日～8月26日

第6回 明治24年7月上旬～8月25日

第7回 明治25年7月7日～8月26日

第8回 明治28年3月14日～3月17日

第9回 明治28年8月25日～10月18日



松山城



道後温泉本館

若鮎の二手になりて上りけり （明治25年）

「石手川出合渡」と前書き。

松山市内を流れる石手川と郊外の重信川、二つの川の合流点を鮎が二手に分かれて泳ぎ上るといふ、早春の句。

橋の上から眺めた若鮎を、自らの人生の転機と重ね合わせているように思える。

この年、帝国大学文科大学国文科を退学し、文学に生きる決意をした。日本新聞社へ入社。

11月に母と妹が上京、3人家族の生活と、生涯の抱負をかけての一大転機に遭遇。

俳眼展開に情熱を注いでいた頃であり、「写生句の妙味」を試みた時期でもあった。

新聞「日本」へ『獺祭書屋俳話』を発表、俳句の革新に着手。



鯛鮓や一門三十五六人（明治25年）

「身内の老幼男女打ちつどひて」と前書き。

伊予松山では訪問客へのご馳走といえば「鮓」=「松山鮓」。

祝い事があれば特に「鮓」の中へ「鯛」を入れていた。

この日は何かお祝い事があったのか、多くの身内や、子規一門の俳人達が集い、ご馳走をおいしそうに食べている様子が目に浮かんでくる。

漱石も明治25年8月中旬に松山を訪れた際、子規の母親八重さんが作った「松山鮓」を食べたことが記録に残っている。



故郷はいとこの多し桃の花 （明治28年）

「松山」と前書き。

3月6日、日清戦争の従軍記者として大本營のある広島へ到着。

3月15日、父の墓参（法隆寺見性院）のため帰郷。

叔父の大原恒徳宅では、久しぶりに帰郷した子規のために、
親戚による会が催された。

大勢、集まった人達の中でも特に、いとこの多さに改めて気づいた
子規だった。

さぞかし賑わったのではないかと想像できる。

窓から見える桃の花も咲き誇り、まるで、従軍を祝ってくれている
ようである。

この日、子規のもとを柳原極堂が訪れ、従軍は無謀だと忠告するが
耳を貸さなかった。

翌16日は、松風会主催の送別会が、三番町の料亭「明治桜」で
開かれ、17日には、広島へ帰った。



石手寺へまはれば春の日暮れたり （明治28年）

明治28年4月10日、日清戦争の従軍記者として中国へ向かうが、その前の3月15日に父の墓参のために帰省。

翌日、道後から石手寺へ足を運んでいる。

春とはいえ、石手寺へまわった頃には、意外にも早く日はどっぴりと暮れてしまったのであろう。ぶらりと歩いている子規の姿を想像することができる。



道ばたやきよろりとしたる曼珠沙花（明治28年）

「曼珠沙花」と前書き。

正岡家は、妹の律が描いた図によれば、草花や果樹が家を取り囲んでいた。

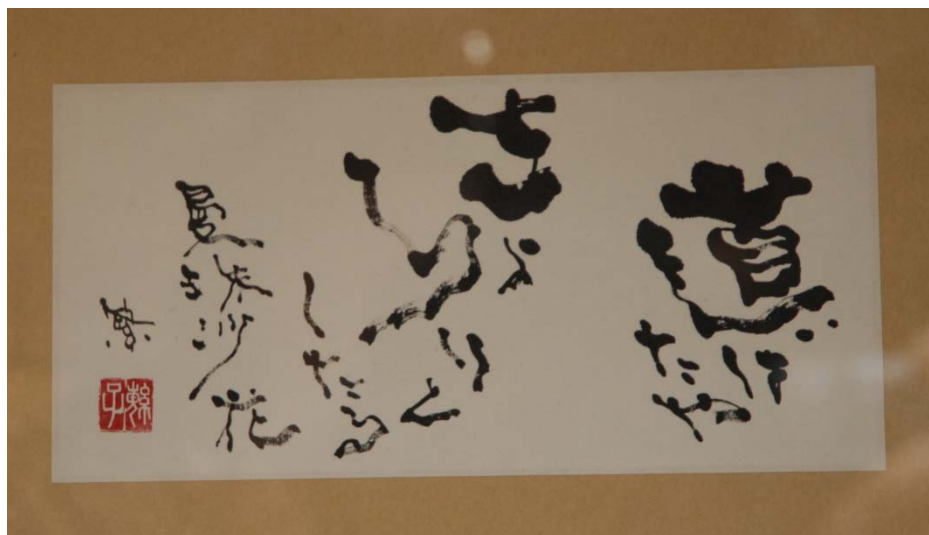
子規は、生家の草花を回想し「花は我が世界にして草花は我が命なり」といつている。

「曼珠沙花」も子規が好きな草花の一つ。

当時、秋の彼岸ともなれば松山市南部の重信川堤防沿いには「曼珠沙花」が色鮮やかに咲き誇っていた。

葉がなくまっすぐに伸びきった真っ赤な色をした「曼珠沙花」が、「きよろり」としている表情を想像し、イメージを膨らませた。

「曼珠沙花」の句を多く作句していることから、子規の「赤色」へのこだわりと美意識が感じられる。



鮓つけて同郷人を集めけり （明治34年）

子規は「故郷」の一文の書き出しに、
「世に故郷程こひしきはあらし」と書いている。
「嬉しくも故郷なり。悲しくも故郷なり。悲しきにつけても嬉しきは故郷なり」といい、
又、「故郷には帰りたい、住みたい」ともいっていることから「故郷」への思いは格別であった。

「鮓」とは、「松山鮓」のこと。

子規は「松山鮓」を好物として大いに愛した。

伊予松山では、一門や知人の集会には「鮓」がつきもの。

子規庵に集まった同郷人に母の手作りのご馳走、

「松山鮓」をふるまったと思われる。

この句からも「故郷」への切実な思いが伝わってくる。



6、作品 - 「子規の挑戦 - 俳句革新」

俳句革新は、明治25年「俳句分類」の大業を志したところから始まり、日本新聞社の「小日本」「日本」を主要な舞台として展開していった。

明治25年には、「獺祭書屋俳話」を著し、明治29年には「俳句問答」を15回に亘って連載するなど、俳句革新の目処もつくようになってきた。

しかし、子規の肉体を病魔が徐々に蝕みはじめ、病臥の生活を余儀なくさせられるのである。

病名は「脊椎カリエス」と診断。

その時の子規のショックはいかばかりであったか想像できる。

その1、面白い句 - 俳句雑誌「ホトギス」へ掲載。「猫戀」

竹縁をふみわたる猫の思い哉 （明治25年）

「猫戀」と前書き。

この「猫の恋」句は、「新俳句」に掲載されている。

好意をもっている猫のことをしきりに思いながら、竹縁を踏みしめている猫の姿が想像できる。

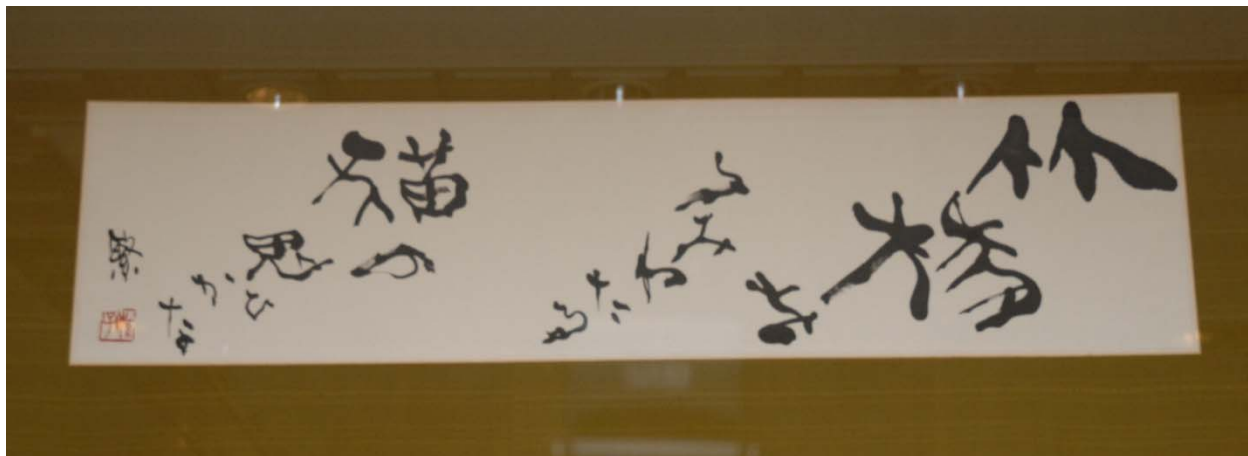
明治25年の子規は、新聞「日本」に「瀬祭書屋俳話」の連載を開始。

この頃、試験を放棄し大学退学の決意を。そして日本新聞社へ入社。

11月には、母の八重、妹の律を東京に呼び寄せ、月給15円の生活が始まる。

子規は、月給より自分の「夢」を優先した。

「俳句革新」という夢に向かって懸命に坂を上ろうとしている子規の姿は、日本新聞社の「小日本」「日本」を主要な舞台として展開されるのである。



内のチョマが隣のタマを待つ夜かな （明治29年）

「猫戀」と前書き。

この「猫の恋」句は、「新俳句」に掲載されている。

「チョマ」とは猫を指す。猫を擬人化し、恋心を17文字に凝縮させているこの句は、子規の内面にある奥ゆかしい心情が現れているように感じられる。

明治29年3月、子規は脊椎カリエスの手術を受けるが、4月初旬には立って庭の散歩ができるようになる。



両方で睨みあひけり猫の恋 （明治29年）

「猫戀」と前書き。

この「猫の恋」句は、「春夏秋冬」の「春の部」に掲載されている。

「両方で睨みあひ」ということは、一匹の猫を巡って、二匹の猫が睨みあいながら競っている情景が想像できる。

明治29年の子規は、5月から9月まで15回に亘って、新聞「日本」に「俳句問答」を連載。

この年は子規にとって、プライベートな面においても、俳句革新の面においても、注目すべき年といえる。



三匹になりて喧嘩す猫の恋 （明治29年）

「猫戀」と前書き。

この「猫の恋」句は、「春夏秋冬」の「春の部」に掲載されている。

一匹の猫への思いを巡って、三匹の猫が奪い合いの喧嘩をしている情景がみえてくる。

明治29年の子規は、子規庵で頻繁に句会を開催。新聞「日本」には、随筆「松羅玉液」の連載を始めるなど精力的に動いている。

しかし、子規の肉体を病魔が徐々に蝕みはじめ、病臥の生活を余儀なくさせられるのである。



その2、明治の「新題」(新季語)

随筆「松蘿玉液」(明治29年)に「古来誰一人詠ざりし新題なれば一句一句陳套を脱せしこと自ら保証しても可なるべし」とある。

これは、新しいことへ挑戦し続ける子規の姿を証明している一文といえる。

おもしろくふくらむ風や鯉幟 （明治26年）

「5月5日 訪猿男」前書き。

「鯉幟」を明治の新題(新季語)として用いた最初の俳人は子規。

「獺祭書屋日記」、明治26年の稿にこの句がある。

「鯉幟」が季語として登録されたのは、昭和2年刊の「新撰俳諧辞典」であることから、子規の造語とも言われている。

しかし、子規グループ(紅緑、鳴雪、碧梧桐、虚子)の中では、季語として「鯉幟」が定着していた。「猿男」とは、森猿男。子規より六歳年長。

明治24年に森猿男は「椎の友」を結成。

子規は、明治25年12月10日「椎の会」句会に参加し、初めて猿男と出会い"運座"を知った。

猿男との交流はこの時から始まる。子規が猿男を訪問したときの句。

プーと膨らんだ「鯉幟」が、風に乗って空中を悠々と翻っている様をイメージした。



子供がちにクリスマスの人集ひけり (明治30年)

クリスマスに小さき会堂のあわれなる (小さき - ちさき) (明治30年)

会堂に国旗立てたりクリスマス (明治31年)

贈り物の数を尽くしてクリスマス (明治32年)

「クリスマス」は明治の新題(新季語)。

「会堂」とは、現在、東京都千代田区神田駿河台にある日本ハリストス正教会(ギリシア正教)教会堂で、正式名称は「東京ハリストス復活大聖堂」のこと。

明治24年にこの大聖堂を建築したロシア正教会の大主教ニコライ・カサートキンの名にちなんで明治時代から「ニコライ堂」と呼ばれ、東京の名所の一つとして当時から人々に親しまれていた。

12月25日のクリスマスの行事がニコライ堂でどのように行われていたか、この4句から伺い知ることができる。

又、子規がいかにか新季語へ執着心を持ち、果敢に挑戦していたかも鮮明に伝わってくる。



夏帽に桔梗さしたる生徒哉 （明治32年）

「夏帽」は明治の新題（新季語）。

私の「夏帽」のイメージは、高校野球の応援の際、女子高校生が被っている麦わら帽子である。

自分の好きな造花を麦わら帽子へ楽しそうに飾っている姿や表情を想像した。

この句によって、明治の女子生徒も夏になるとお気に入りの帽子を被っていたことがわかる。

子規の美意識の高さを感じさせてくれる。



7、作品 - 「根岸の子規」

ここぢゃある家あり梅も咲いておる（明治27年）

「訪人」と前書き。

「ここじやある」と、いきなり話し言葉から始まり、しかも、伊予弁であるところに先ず、親しみを感じた。

子規が知人を訪問した時の句。

知人の家には梅の木があり、花が咲いているという。

これを目印として訪ね歩いていたら、ようやく家を探し当てた。やっとの思いで探せたという、喜びと安心感が伝わってくる。



縁側の子規明治32年6月19日



春風にこぼれて赤し齒磨粉（明治29年）

明治29年1月、歩行困難となる。

2月には左の腰が腫れて痛みが強く、ただ横に寝るのみで、身動きも容易にできなく寝たきりの状態となり、これから長い闘病が始まるのである。病名は「リュウマチ」ではなく、「カリエス」と診断。第1回目の手術を受けた。句からは、気丈の明るさと、春風によってハブラシにつけていた「齒磨粉」がこぼれたという情景が見えてくる。

又、「赤し」の表現は、子規の「赤色」へのこだわりと色彩感覚の表れが感じられる。

子規の三大偉業の一つ、「俳句革新」はこの年でほぼ目処がつき、この後は、「短歌革新」へと向かっていく。



やかましきものニコライの鐘秋の蝉（明治30年）

病床にありながら、「俳句分類」や「病牀手記」等の執筆の日々を送る中で、子規にとって最も耳ざわりなものは、ニコライ堂の鳴り響く鐘の音や、蝉の声であったと想像する。

明治30年の子規は3月に腰部の手術を、4月下旬に再手術を受ける。

9月頃、ようやく布団の上に座れるようになる。

高浜虚子への手紙に「涙もろきも衰弱の結果にして死期の近づきたるものと断定致候」と書き記している。



フランスの一輪ざしや冬の薔薇 （明治30年）

「フランスの一輪ざし」とは、叔父加藤拓川からフランスのパリ土産としてもらったクリスタルガラスの花瓶のこと。子規の枕元には、庭に咲いている薔薇がクリスタルガラスの花瓶へ活けられていたのであろう。

パリ土産の一輪ざしと薔薇の生け花は、病床の子規を大いに慰めたことと推測する。病魔と闘いながらも、「美の標準」を貫き通す子規の強靱な精神を、この句から垣間見ることができる。

又、それは後の随筆「墨汁一滴」(明治34年)に、「痛いことも痛い、綺麗なことも綺麗じゃあ」でも証明されている。



一匙のアイスクリームや蘇る （明治32年）

8月23日午後3時頃、
人力車で神田猿樂町に虚子を訪ねた時の句。
朝から気分もよく、新聞「日本」に連載中の「歌話」の
原稿を書こうとして書物を見ていると、岡安宗武の
趣向斬新な万葉調の歌を発見して嬉しくなったので
虚子宅を訪れようと思い立った。
10日ほど前から発熱がないこと、少しは坐れること、
杖で支えて歩いてみたかったことなども理由である。
酷暑の中でのアイスクリームは、ホッと一息つく涼しさと
美味な舌触りであったと想像できる。アイスクリームや
西洋料理をご馳走になり夜帰る。お土産にはアイス
クリームをもらい、帰宅後直ちに虚子へ書簡。
「アイスクリームは近日の好味。早速、貪り申候」。
添えられた句は「持ち帰るアイスクリームや簞（たかむしろ）」。



風呂敷をほどけば柿のころげけり （明治32年）

明治32年の子規は病状悪化、寝返りも不自由となり、叔父大原恒徳宛書簡に「毎日繃帯のとりかへにハ大声あげて泣申候」と書いている。病状がやや緩むと人力車で外出をし、吟行、歌会、文章会などを開いて指導にあたることもあった。子規は大好きな柿を人からたくさんもらったのでしょ。風呂敷に包んで持ち帰り、包みをほどいた途端、柿がコロコロとこぼれてしまったという景。子規は食べ物の中でも柿が好物であり、柿の句は多く作句している。この句は、なんともほのぼのとした余情が感じられる。



8、おわりに

瞳目すべきは、明治の文豪たちが、建築について着目。

『夏目漱石』 『永井荷風』 『森鷗外』

いずれも日本の景観について、欧米の都市景観を自分の目で観て比較し述べている。

又、子規も。明治32年1月1日、随筆「400年後前の東京」「400年後の東京」を書いている。新聞「日本」へ掲載。この日、発熱あり。

愛媛県の建築で注目されるものは、

「愛媛県庁舎」 - 1929年(昭和4) 全国でも3番目に古い。

「萬翠荘」 - 1922年(大正11) 当時の社交場。

「内子座」 - 1916年(大正5) 芝居小屋。アクセス:松山市から車で1時間。

「愛媛県庁舎」「萬翠荘」は、建築家『木子七郎(きごひちろう)』の作品。

1884年(明治17)生。1911年(明治44)東京帝国大学工科大学建築学科卒業。

現在、松山の観光で賑わっているところは、
「道後温泉」「坂の上の雲ミュージアム」「松山市立子規記念博物館」「松山城」。



道後温泉本館



道後温泉駅



坂の上の雲ミュージアム



内子座(外観)



内子座(舞台)



松山城

写真資料協力 松山市立子規記念博物館
(社)愛媛県観光協会
参考文献 講談社版「子規全集」
制作・著作 石丸繁子